

特56

338

大講義垂水良運錄

明治往生傳三篇

完

明治十六年十二月新刻

明治往生傳三篇完

日新堂梓

明治往生傳三篇

目次

州駿東郡奥之澤

唯念行者

初帙右

州小田原驛蓮上院了我法印

八帙右

一同州鎌倉郡材木座邨光觀學士

十二帙右

一同州足柄上郡峯村 慈仁信士

十四帙左

一下總葛飾郡稻荷木邨五良兵衛

十六帙右

一伊豫北宇和郡吉田本町保田喜六

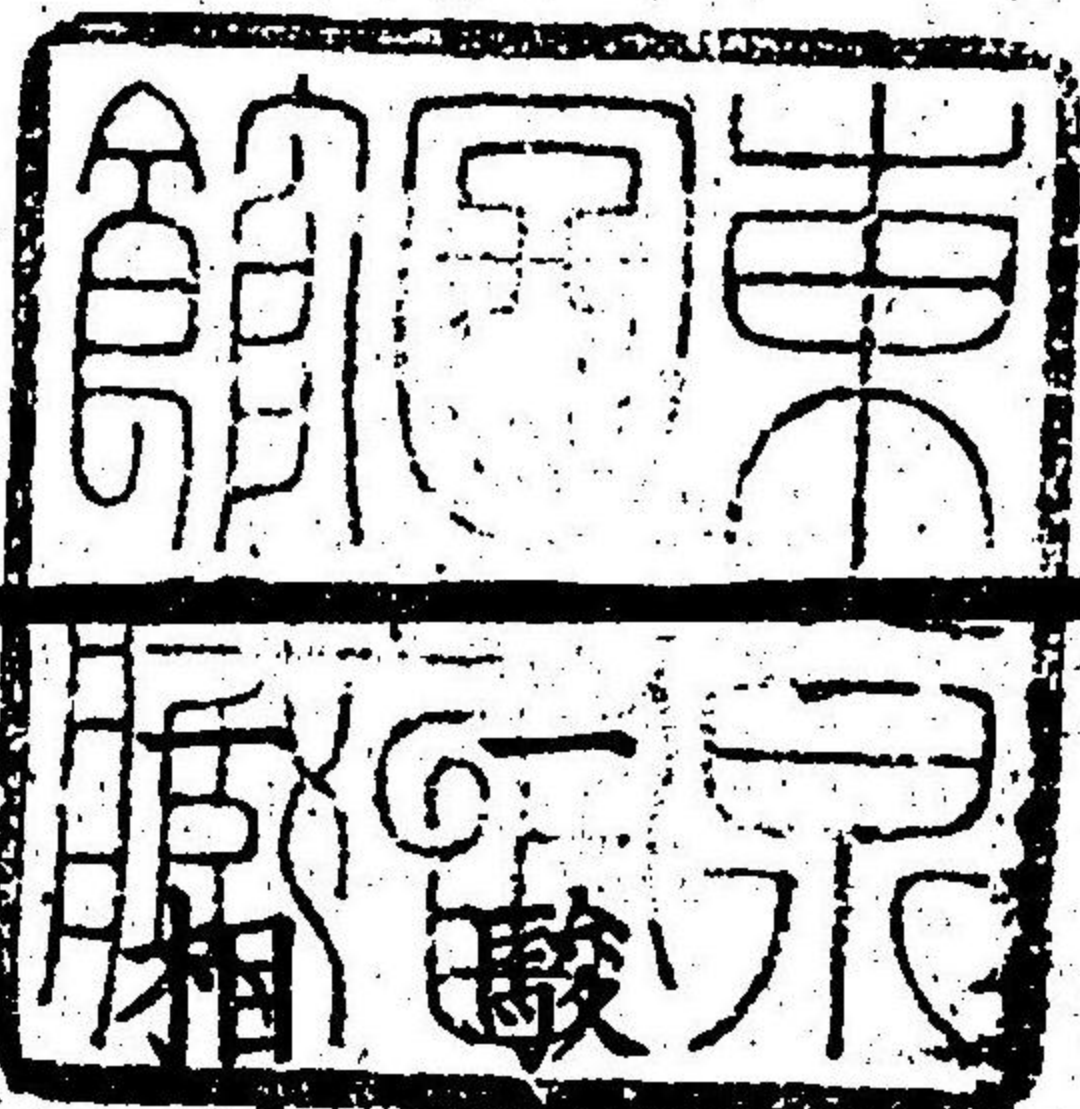
十八帙右

一山城久世郡東富野村森田九右衛門

十九帙右

一泉州丹南郡岸和田貞道禪定門

二十帙左



一 磐城磐城郡中塩村 大山與助

二十二帙左

一 豊前企救郡田町緒方屋女 同母

二十四帙右

一 東海道駿州島田驛浅田屋女

二十五帙右

以上十二人

明治往生傳第三篇

權大講義垂水良運 録

唯念行者

唯念行者ハ一蓮社向譽尊阿弥陀佛と宗歸り俗姓詳
 不詳。肥後國八代郡八代乃士族ありといふ。其性淳朴
 剛勁し、幼時より三寶ヲ篤信あり。○十四歳の時東
 都小東里にて親縁乃方小居られりれど、免み角世俗の交
 を厭ひて出家の志あり。文化三年丙寅十七歳より遂
 に下総行徳郎徳願寺院に入て誓髮辨端和上を拜し

別深受戒より。○文化五戊辰年十九歳辨瑞和上右命小
依く。膳振國有珠郡有珠邑英 旧 暇 大白山善光寺へ。移轉を
るる。予予隨後して。彼地下趣きなり。○文化七庚午年八
月十五日大雨乃埃俄然として大雪ふ。雪トふ時乃天候
冥冥予警き。諸人大予困惑より。行者ハ師ニ隨て。湖島乃
觀音堂より。一七日別時念佛と終り。同廿二日は陸事
なく大白山より歸りきりり。○聖平未年二歳。廿一月三十
日より。地震く大白山破裂す。寺内乃道俗わさる。あり近
道乃人々も恐怖し。おとぐく十五里以外へ逃盡れり。
同年五月廿日。至り。破裂地震も。層々積敷まりれ。六

月中旬行者ハ僧侶二人と申合く。善光寺乃動靜し。い
あり。一やむと。帰山して大白山を登りて。見る。不破裂
志する所乃灰乃上り何ものあるや。とむ。大人乃足跡。鯨
一天六。有三僧是を見く。怪し。警し。兩人を恐ま。其時
下山より。行者を交す。怖る氣色なく。即日より。空座よ
く別時念佛修りて。きりり。

此時より。ありむ。行者が辨瑞和上は。隱道菴山乃志哉
語して。暇を請れり。る。和上教誡し。如法衣一具
と。蕎麦粉一斗と思給。と。与り。と。其教誡の旨。今不思出
り。き。忘。難し。と。老季。至り。ても。時。中。出。き。り

。其。か。乃。足。跡。乃。大。なる。之。の。ハ。彌。猴。乃。年。經。く。る。之。の。お
ら。む。と。語。ら。ま。り。る。と。ぞ。嗚。呼。是。を。知。く。怖。ま。せ。即。日。別
行。を。し。ま。り。る。ハ。實。ハ。不。惜。身。命。乃。菩。薩。行。と。や。い。ま。む。
其。勇。烈。忍。耐。常。人。乃。及。ど。ぎ。る。所。あり。然。し。く。障。礙。ある
事。あ。ら。ハ。全。く。佛。天。乃。擁。護。を。も。べ。き。の。と。
辨。瑞。和。上。海。と。増。上。寺。大。僧。正。乃。特。命。お。て。武。州。岩。槻。淨。國
寺。へ。轉。昇。を。し。ま。り。る。お。ぞ。行。者。此。時。和。上。乃。座。下。と。辭。志
す。是。より。雲。霧。乃。境。界。と。な。り。身。を。風。雨。に。任。ま。す。法。國。乃
高。山。湖。邊。に。在。り。專。修。念。佛。乃。外。他。ま。な。り。り。り。り。
一。時。ハ。南。部。乃。宇。曾。利。山。山と云登。り。別。時。を。修。を。し。ま。又

羽。前。國。月。山。湯。殿。山。羽。黒。山。に。登。り。修。り。を。し。り。り。事。三。卷
年。此。留。美。夢。と。感。ぞ。し。ま。し。事。ある。越。あ。れ。ども。そ。べ。く。感
見。乃。事。を。ど。ハ。信。ま。く。他。に。語。ら。ま。り。を。知。姓。し。○。文。政。三
庚。辰。年。十。月。神。田。山。幡。隨。院。方。登。順。良。上。人。に。依。り。三。脈。と
相。傳。を。し。は。時。に。年。三。十。一。歳。あり。○。翌。年。辛。酉。同。十。一
戊。年。迄。武。州。八。王。子。高。尾。山。峰。の。業。師。に。籠。居。し。て。別。行。を
ら。し。め。事。八。箇。年。を。り。○。文。政。十。一。年。三十富。士。山。に。登。り。始
く。義。賢。行。者。と。稱。し。衆。徒。し。く。彌。念。佛。願。修。を。し。り。る。
此。義。賢。行。者。と。り。し。ら。る。當。時。志。修。願。以。乃。人。あり。念。佛。三
昧。發。得。乃。人。に。く。誠。を。し。り。及。び。ま。り。る。奇。異。乃。事。蹟。も。あ。れ

ど。ま。り。の。累。一。ぬ。終。り。盡。中。立。山。少。く。命。終。せ。ら。れ。し。が。
閣。維。一。く。不。彩。の。舎。利。と。得。う。り。し。と。あ。ん。

○此。年。甲。州。郡。内。柳。之。留。山。ふ。く。九。十。日。別。り。を。し。は。此。地
ハ。明。心。行。者。乃。修。り。を。し。き。一。跡。を。く。最。殊。勝。寂。靜。あ。る。所
あ。り。と。う。や。其。頃。九。十。歳。修。乃。尼。公。住。し。堅。固。不。念。佛。修
行。を。し。何。里。行。者。此。別。行。を。し。し。と。見。く。其。僧。ハ。是。より
東。乃。方。小。有。縁。の。地。あり。其。所。不。至。り。と。念。佛。せ。べ。し。と。示
され。り。其。後。始。く。奥。之。沃。不。至。り。と。別。行。を。し。ふ。茲。と。定
む。る。心。も。な。く。終。り。を。亦。小。住。在。せ。る。事。を。あ。り。し。ハ。實。小
有。縁。の。地。あり。り。也。彼。乃。尼。公。ハ。直。也。人。ハ。あ。く。波。と。言。ふ

不。念。佛。を。し。し。乃。清。亮。洞。越。と。も。心。魂。ハ。徹。し。と。い。と
考。へ。し。り。今。又。耳。ハ。妙。を。思。出。と。る。と。行。者。之。が。う。う
語。ら。れ。り。也。

此。乃。明。心。行。者。在。事。ハ。明。教。新。法。千。三。百。廿。二。號。明治十五年五月六日
雜。報。乃。中。小。没。没。彼。乃。遺。骸。六。十。八。年。と。經。く。壞。毀。を。ぞ
る。より。京。都。の。博。覽。會。の。物。品。ハ。出。せ。し。と。也。其。俗。姓。を
撮。畧。し。て。掲。載。せ。り。今。其。要。と。取。り。茲。ハ。あ。く。明。公。行
者。姓。ハ。古。野。名。ハ。小。一。郎。幼。名。熊。吉。美。濃。國。大。野。郡。神。原
村。乃。人。幼。年。より。俗。差。と。厭。ひ。く。佛。道。不。歸。依。し。今。と。距
る。九。十。一。年。乃。昔。寛。政。五。癸。丑。年。齡。少。ク。小。十。五。歳。あ。く

信州善光寺へ奉詣せしめて家を出し給ふ。善光寺中善
光と師と一々剃髪し其後甲州都留郡鹿渡邊仲右
衛門宅に寓して終に鹿留山中御正躰山に草庵を結
び専修念佛に文化十二年享齡三十七歳端坐して命
終り。形體枯槁まじりくも像を交ぜて越後國弘
智法印乃如く六十八年を經る乃今日尚像を壞れ
已上新法今此乃厄公のするに者に相傳りて中國肥後乃
人より何ある故り有りむ。生涯古乃幾種と見え
公申ひそか小夢想まじり給。或夜の夢に生身に義經
を思むと思も。甲州鹿留山に至るべしと見え覺ぬ。

相本國乃家とぞそらひ出く所を徑過し茲に來り
て明心行者と逢ひて念佛修行をせしり明心行者を
世に幾種の再誕ありとりへるは是よりやいふあり
む。彼厄公の姪女乃再來よりやあるべしと行者にい
はれり。

文政十三庚寅年四月より富士山の麓奥の沢に修行
三箇年。○天保四癸未年より富嶽奥乃院にて執行念佛
五箇年。○同九戊戌年再び奥乃澤に下りて菴居念佛と
り。明治十三年より四十余年乃毎間修行あり。其間別請
する所あれど出て化を施されり。徳不孤必有隣乃智

ひ。幽僻深谷乃地もわづらうとさきなりて。奥に伏へ借
づる信徒少あり。始と密膝乃一草庵も。終り一字乃
めく成しより。明治七甲戌年。静岡外廳乃特薦。依て教
部省より新平滝は寺乃辨と賜。駿河國駿東郡御厨上
野村奥之澤龍澤寺。開基師とぞなりしなり。

瀧澤寺ハ上野郷より十八町余。山谷に入りて。寂莫の
地なり。行者の修りききし。是より又一里許も山
より。予のまごころ。傍乃滝。下て垢離。念佛礼拝をすれ
り。と。予のまごころ。其境。諸らねど。傳へて。歩く。実
幽邃。無人乃境。予て。不惜身命。乃強機ありて。修行未

り難き地。之行者ハ。まごころ。出凡の意ありとぞ人
のひりる。

行者一世乃形状。麻衣一疋。余ある。多し。素飲
水。食時を簡む。晩年別。終りて。や。常食を用ひら
り。予あり。終きた。一日。或ハ一食。乃。命終。前。三四年ハ
三日。四日。二十食。又ハ一日。三四度。食を。する。あり。烈
寒。此。時。とり。多し。も。単衣。跣足。花鞋。を。付ら。計あり。九
十歳。又。近。を。齡。より。遠。行。き。く。予。同。伴。若。齡。乃。者。輒。其
れ。を。後。歩。して。息。喘。せ。る。予。至。れ。り。其。足。疾。き。る。飛。ぶ。が。如
し。

明治十二年庚辰年五月縁長門山より別荘ありて。八月
乃頃々意化さく多量き魚鮑ありりれを此頃々至りて
随伴の者より促しりりり。行者俄に意國赴訪の事止
るべきより申されりり。いふある故よりと人よりふり
しく思ひりる。小果しく至り至り大漸とありりり。小
ぞ。偕々あふかた死期乃をきを知りりりり。やと。後
より思ひあふされりり。

同年七月乃頃より。稍老衰乃危ありりれ。化他出りも
疲勞甚やうよ思へりり。常産ふ臥念佛勵行乃外他
変あり。八月十日乃頃より至りて臥床より起りり。され

と称名ハヨリきんせ。命終二十日前より飢食し。水
飲を以て咽喉を濡すの事あり。十二日よりハ水穀を
小飲く。激者念佛さくは法才に信徒来りて名歸或ハ龍
字の字書と清ふり。辞せる色なく執筆をりり。小後
あつて命終の前日中夜書写をりり。○同廿二日夜
行者臥室震動し。两眼より光を放つ。廿三日夜命終
乃時より一室白昼乃如く俄然としく光明照耀せるを
見る。是れや来迎と感見せり。れりあるべし。面貌笑るが
如く念佛乃唇舌動く中より命終さくきりり。実し明治
十二年庚辰八月廿三日。享齡九十一歳あり。嗟呼行者乃

別穀二十一歳より身を雪水に任せし。海山函谷乃境地
を管す。次専修廐坊八十年正しく入山。篋居し。一雨
行住する。又十六年とりあり。其行功修徳。空唐指あり
むや。感見好相も多。揣あるべりれども。嘗て是と語らば。
命終。去三年前。旧正月元旦。五鼓乃化佛と感見せし。れ
を。心あく小僧。三歳念徳とりつる。と語られり。念徳を旨
と。竊り長老。本性とりつる。語りりる。ぞ。世に行者。と向
ひく。そのと。存りる。此の。浄土宗乃祖師。堅く。誠。是。あ
れ。を。存命。中。い。か。あ。く。次。他。言。致。す。と。く。と。嚴。く。中。に。さ。れ
り。と。好相。を。自ら。口。外。を。し。ぬ。意。地。知。る。べ。し。今。の。臨

終乃時。侍人乃感見。そのを。あ。ぐ。
明治十一年。内務省より。今。お。ま。と。更。と。瀧。山。唯。念。寺。と
号。せ。べ。し。と。指。令。あり。と。あり。

唯念行者乃録

真乃。津。上。を。紀。法。乃。念。す。かり。幾。年。経。く。も。色。の。か。を。し。次

随。茲。乃。降。り。予。も。は。音。を。ら。り。と。く

良運

咲。そ。を。一。真。能。津。邊。の。法。の。を。ま。あ。ひ。ま。四。才。に。信。入。り。多。う。那

了我法印

法印了。家。大。和。尚。の。相。州。鎌。倉。郡。腰。越。村。乃。人。と。て。因。良

小田原真言宗花木山蓮上院乃任持なり其性烈毅俊逸
よしそ宗義更相う達せしむる能くありし次儒典をも能
きくまぬ近時本宗乃管長ありし道應師あぶる莫逆乃
友ありしと。因沙東向の度にかあはつて次尋訪せしれ
りり法印仕対道應沙と。苦學せしむるなどよりく語を
出せり。予が小田系を任せし時海客なるともて目くお
行通ひて法話す時を稱せし予常をりり至一時明通僧都
好談す及ぶるあり。法印云僧都の系宗より名譽乃師言
野山より遺才勝蹟今よ跡ま至。されど隱遁しく再び
明橋を出すと。簞居しく浄出家り歸し念佛せしれしと

く。系宗之臨終乃方軌あれど。寂期に至りては。是を修せ
る小違あり。次。實小臨末の期より。念佛し遺するの
と。云。予云。宗執法我をおのく具する事なれ。浄土宗上
り新くし。自法是深の法を交ふれども。其実出離
を思ふ乃法常今末盡乃盡り。直出生死乃法浄土門
を。明通僧都乃淨依も。茲にありとて。大師勅
傳の中。明通吉水各肩同答。性傳。四天王寺。乃系宗と
辨説し。系が宗義を悟りり。法印殊に信感し。さ
れむら。際終り至りて。念佛門に就する法をけれと
中。されく。解談より。ぬ。○慶應四年五月。卒。然中

乃疾殺りしる。後職と没してその子の隠居をすまは
す。○明治五申年二月近傍一老翁予が許り来りて謂く。
頃聞く蓮上院隠居穀食と銘く録死せんと次と定く知
る。前後任職の間隙より起りて。難堪の象あるよりは未
るべし。作人の制心を用ゆべし。平常無二乃心友ま
れむ。坐僧是と諫止し終へし。云予は程三十日許尋訪も
せざりし。故何ある云者の男一と知く。一交を警し。が。
情思ふ。法印乃生平友の如き少事。捨身すべき意あ
らば。是ハ決定禪社かふとぬと強く存在せしより。身世
小飽りあるべしと思ひし。予謂へり。僧乃穀食

を銘く捨命せしる。古来ある事なり。はた其の修業を執り
申にある志乃知る。命をあきらむ。然きども前後任乃間隙
あどより。形ある事あり。むむ。僻事あれむ。其志を
止む。十一日。蓮上院より。此時穀食と銘く
より。十一日。目ありし。其志。壁上。終正念と。大文
字。書く。粘つけ。下。不動明王。画燈を掛く。獻
香。病者。小僧。人看護。予
果。然。病者。向。此。度。決。心。
の。病。疾。却。厭。世。の。媒。と。減。弱。強。乃。心。
法。印。微。笑。し。君。の。心

友あるともし能く赤意を知らり。今日迄數十人を見舞來
りしりへども。今此言ともしはるの君一人あり。余甚満
足なり。僧者として或は是を諫しするあり。世間機嫌乃
事と例云く。余と制伏せん。次に腹痛をすかりとい
ふ。予又云古來乃明哲。寂期を一大変とをさるのなり。
今度決心のさる事なれど。余をせむ。臨末魔境ありむを
恐る。形を決心あると魔障をく。流轉の因と成さる。後悔
を詮ふるる處。寂期乃の品りし。決定しぬるやと。
法印又微笑して。今の明通僧都なり。宗規あれど小僧小
光明言と唱へさせく。余は但念佛之といをさるし。みぞ。

予も隨喜落涙しく。形を余も安心なり。猶れバ世上通
信の見廻あどし。再びあるは。予も自坊あり。臨終正
念の加被を祈求し。侍るべりれど。かあ。法明通僧都
のひのへと。程自他二力の取捨。仰頼す。願乃意志を語り
く。訣別後を仰つて。歸りぬ。侍予も日別法印の臨終正念
を祈求し。爾後法印微音念佛間断なく。善く宗祖の
滅日小絶息し。とやされ。うり。よ。布衣乃ぬ。三月
廿七日。塔生定印と結び。念佛と共に息絶をすれぬ。実
に明治丙申年三月廿七日。夜影を。を五千六日なり。世
壽七十歳かりた。

評曰。憊いとじく人乃命壽いのちを智ちる。癩疾らしか根欠ねがへ乃廢人まじといへ
 ず。死しをやりん本能ほんのうを度あは。此この法印ほふいん病疾びやうじやく却かへ善因縁ぜんいんえんとな
 り。身み世よを履ふひ捨命すなはする。至いたる。水穀みづこくを飲のみちり。五千
 解と。於ま自若しよじやくとして死しを見る事こと得える。がぬく。謂いづ
 到いた得志とくし曾ひ対人たいじんと。或ある僧者そうしや乃長病ちやうびやう。一い。難治なんぢの症しやうと
 せ。あが。自ら死しを忍しのぶ。能あく。世よ執しやくし着ちやくして却かへ
 く。世よに死しを忍しのぶ。の。ある。実まことに愧かたぢきするありかし。
 命いのちに延えん但だんを前業ぜんごう乃定まる。所ところあれど。孫まご履ふひ孫まご憑たのじて。
 業ごうを累滅らいめつの念佛ねんぶつする外ほかあり。と。

明譽光觀學士

明譽善祐光親めいよ ぜんゆ けいけん。相州三浦郡林村さうしゆ さんぷ ぐん ばやし むら。本田喜兵衛ほんた きべゑ乃次男ついでのおとこ小
 了せうりやう。幼名忠七わらわし ちゆうしちといふ。幼稚わらわし乃時ときより柔和善順まろやうぜんじゆんより。悔まじ
 之室このむろ乃志厚こころあつより。れむ。明治十二年二月十三歳めいし じふにねにふにじふさんさいより。鐘かね
 倉光明くらくわうめい吉きちの座下ざかに投なげ。剃髮受戒しはつじやく一日いちにち深念しんねん
 佛ぶつ五百遍ごひゃくへんを誓ちかひ。懈怠けたいする事ことなし。然しかるに宿業しゆくごう乃感報かんぱう
 する。や。人ひと府ふ乃持病ぢびやうあり。弱よわ乃身みあり。種しゆと持ぢ
 療りやうを加くへ。皆みな時とき有名有名乃淺田宗伯あさだ そうはく其その餘あま乃醫療いりやうを盡つし。りれ
 ど。業ごう更さらふ効きやくなし。茲こゝに於おく彼か乃戒賢けいけん論ろん。至いたる宿世しゆくせい継子けいし
 乃頭かぶ小針こはりを刺さする。業果ごうくわに。常つねに頭痛づつうを悩なやみ。終つひひ。り

なると思ひ浮ぶ。宿業乃杜責と懺悔。現在乃為と
地を告を教拜し。後世乃為と専ら日課を増祿をり。一
時長谷慈眼院に在る。連日親者の冥應祈禱を。現世
の為を。次とぞ夢へり依。○同十三年八月。親に実父の
大往生廣善信士二篇載入遂られしと。又く。所依乃心を増進し。日課
を加倍し。五千遍以上と勤免り至。○同十五年長病を
るを。母乃看護を交ぬ。された
西刹の往生と。欣慕し。迎接乃遲きを待つ。老病篤信乃
者。り似きり。同七月。日頃。一日朝日。諦立氏病を討ふ。相語
の。留小病人。が。病。お。そ。承。牙。より。て。善知識と。述。く。如何

やといふ。りぞ。実り。殊勝ありと。尋へり。祖師乃所謂待
曉天。高客。鷲。雞。鳴。猶喜。欣淨土行人。得病。惱。偏樂と。此僧の
安ん。決定乃。昔今乃。一句。り。そ。も。知。ら。き。多。あり。此。程。明。治。往
生傳初篇。冥應法子。九歳。り。て。火。往。生。を。し。と。多。く。て。亦。も。此
友。極。樂。へ。往。生。遂。く。し。と。い。ひ。く。口。律。と。き。り。○此。處。乃。盆
祭。り。近。來。一。月。後。き。た。れ。ど。八。月。十。三。日。より。佛。壇。を。座。敷
床。乃。間。り。飾。り。て。供。養。を。諸。益。祭。畢。く。病人。が。此。位。佛。壇。を
置。け。り。へ。赤。佛。前。り。在。る。往。生。志。な。し。り。不。放。り。空。り。但。き。く
を。信。り。居。れ。き。ぬ。○二十日。い。き。く。半。睡。を。る。と。又。く。一
が。養。小。言。僧。來。臨。し。終。つ。り。と。て。覺。き。喜。悦。念。佛。せ。る。事。頻

かり。爾後一層稱名策勵きり。○廿八日午前四時身不
衣と着し起坐ありて來迎佛に前に向ひてうらう清浄
糸を取て端坐合掌稱名を相續し笑と會て眠るが如
く往生乃素懷を遂りり。実不明治十五年八月廿八日
陰曆七月十五日 壹壽十五年六月あり。佛檀乃前少を乃ぬく。往
生とて縁し免死を知りてや。不思議と謂ふ。○
聖廿九日午後やぐ。亡骸と端坐乃信諸人結縁とむ。
容貌變ぞ次笑を會て生るがぬ。決定往生に兆相を
りとぞ。感下ありり。没後病牀の側り一小冊乃款及
び句あり。

中々むむ繼る此身と何孫陀仏とらびきき人花の淨土
り川來とも此世をりり。候乃宿助を佛檀とて次會佛
おそ病や苦ある邊邊にお遠を。迹乃信む孫陀の心
と下か病苦難儀を引信し其乃身とてふ南地花
是うらう孫陀り信とておがいのち
今日ハ居る明日ハ居るぬ命う那
命こふあがとどかあれ此世う那
款款向やも秀逸とてあざれと。光觀が厭候乃実心と
えりり是れを若り記し於戲年來乃虛弱長時の病患
厭候乃因種とありて永く有漏乃病苦と脱る。実不病と

そ若知識とまづくおもつるなるべし。病と倚る業作
乃効をたまく念佛して平快を祈求する僻安心者愧る
きりのとや。明教新誌千三百九十号
九月廿二日雜報ニ載之

慈忍信士

信士大哲慈忍。相州足柄上郡峯村農細谷武右衛門
りつるを其あり。其性質木訥壯齡より三寶を崇敬し
能く念佛なり。唯念行者乃勅化し依り。孫増信介。日
別称名忽ら淡ありり。○明治十五年四月廿一日隣村
へ所用乃事ありて往く途中忽然とて異僧不値ふ乃ち

いそく油近日極樂へ去るをれど早く帰宅しそん支度
とよと信士夢て直に宅に歸り。其相乃法不を取調り集
免聖聖廿二日死。葬乃具。經惟子勝尚頭陀袋等其外數珠
守護牘の類跡。淡彼の頭陀袋乃中へ入至て。廿三日ハ
終日夢をみて少事をも経てを淡。廿四日ハ終日専ら念
佛して写影あるなく。死乃至ると待つぬ。廿五日自ら
座より入りて卧具と布りを。頭北面西より臥し。右手と枕
と。左手と左足の上より垂ま。微聲念佛を言ぐ。息絶し
り。其相釈尊涅槃の像を異あり淡と。人々奇歎し
ありり。時ハ明治十五年壬午年四月廿五日。行年七十五

歳あり。

評曰嗟呼此乃一老農死脱を自在にせむ羨むに堪へり。仕時より念佛をとりとりんを。外相通帯ありて密修する。愛りる。将宿世修習乃人ありや。さう次はし。あぞ此乃境に至るむ。傳聞する隣村へ往く途中釈尊ふ逢きり。如来乃は告云と。再いゆへりとりん。是ハ何乃所見ありて釈尊と見定りや。愚妄乃一老まあれを知らず。故に本文の異僧とのこと記し。れど。さりとも少あるは。を覆せんもなきありん。茲に志るにぬ。釈尊乃教遣ふもあれ。聖前乃来迎ふも

何途途中に指示奇といふ。庵といひども。利益を究めんと。来途も一定に庵を。次質直ハ赤宗の元意を誠心の全分あれを。素樂質直あるより。新の應用もある。庵にすれを免ふ。角是直に本教を伝て。往生を願ふ。是ぞ三仏具足乃念佛あるべし。

浄真信士

莊譽嚴光浄真信士ハ。下總葛飾郡行徳驛徳願寺檀徒として。稻荷木村渡邊五郎兵衛といひける者なり。明治十二年二月初旬病床に臥しり。りるが。蓋て平名に徳教を覺

天氏乃化導と稟く浄土の法を授けり。此の法を授けり。浄信
海より伏。此期に臨み。死乃遁るべし。と覺知し。日
夜を念佛に専ら。○三月十七日。子息徳治郎と
枕邊に招き。來ル廿三日。ハ必だ往生せむべし。其
由を書き障子に粘せよ。とりし。法治郎大に驚き。往生
ハ縁く決信を授けり。されど。お遠も思はれども。そ
日と指して。そのハ。古來乃先達も希なりと。夢く。され
む。形あり。ぐ。き。思止り。念佛に専ら。往生を
待たんと云。病免し。病人を聊く少入る。氣色なく。強
徳治郎之由を書き。枕上り帖せり。是を評する人。是

を専ら。他更なく念佛する。程に稍。白あも成り。此
日ハ別く機嫌よく。見たり。み。徳治郎を招き。本
人のより。なき。と。ひ。出。他乃。嘲りを招き。本
と。法。や。き。居。頼。當。生。合。掌。して。稱。名。を。あ。げ。り。
息止りり。時ハ明治十三年三月廿三日。壽六十八歳九
ヶ月あり。明教新誌九百七十五号
十三年五月二日掲載ス
評曰。此人。暗。佛。告。を。得。く。形。く。思。定。を。志。あ。る。べし。
子息乃。諫。止。し。も。動。ぞ。れ。ざる。磐石乃。一。心。單。信。乃。一
途。あ。る。より。果。く。其。終。を。遠。へ。せ。本。願。乃。應。用。他。力。能
妙。術。唯。信。を。信。ぜ。べし。徳。治。郎。淨。土。高。門。に。入。ら。ざる。唯

理唯性ヲ僻執するもの或ハ是ヲ疑ク是妄心乃所發
二ノ唯僥倖ノ一邊ト次是を疑ふ故ニ應用ス。應
用すべきを以て妄ト。其なきを以て正ト也。此ハ是本
願念佛法爾ノ應益一ノ求むト一ノ必得成リト次。
求免ざれども亦得リト一ノ唯念佛往生仰信單直ノ
一ハ一ノ依く尔モ凡そ隔歴思直ノ情念をり。性理を
論ずる亦是妄心ト一ト。豈ニ真妄乃端緒とも得る
む也。所談ノ言ノ性理ニ契へト。心念佛ニ至實境ヲ
至む。所談同ト一ト。妄心あり。更ニ本願を仰信
念佛ト。此念佛ハ妄心乃中息妄乃法ト一ト。
なり。

古來今往時を指く。死を取る往生人救奉不違あり
次。此段凡測の得く論ずべし。石之唯現験を
更し仰信すべきの。

保田喜六

伊豫國北宇和郡伊予長福寺檀徒吉田本町二丁目保
田喜六ハ性秉篤実ト一ト。佛教を教信深ク。弱齡乃以テ
リ。接り乃時を除く乃外ハ日々菩提寺ニ詣り寺門乃世
活残る身あり。常ニ親近ト一ト。お乃づり法海を交ヘ。二。
明治十四年八月妻女せり。長女えいの一人ガ。同新大信

寺あり五重相傳せし。自らも亦親族某と譲りて同志
十名と募り。菩提寺乃任職よりおあどく五重をお傳り
くお内りたるも専修念佛お續きしうけ。お勢すゆく温
榮し顔きりる。○翌十五年二月風と胃病は罹りて種々
疼痛しりれども効あく。日と追く衰弱し及びりる。五月
二十日ゆわ報命逝き難く定壽も是れあつむと覺せ
く妻女長女乃と看後人となし。必死の遁るべくざる変由は
願解るる故あるべし。他人乃病室より出入するを辞し。何れ世
変を語りて病室を離くむ。自ら稱名念佛せし。廿
四五日より親の聖慮乃本迹を感し。或は天花乃降る

を見る。欽表一かゝあつ。次はゆわく。稱名策進し。廿六日病
室より来迎佛現安坐し。大信寺吉水得譽氏を請し。臨終
答知識とて法話を述べ。合掌端坐し。言終り念佛稱
へ川。遂に廿七日午后七時眠るが如く往生を遂ぬ。実
は明治十八年正月廿七日。世齡四十九歳なり。と。明教新
徳千三百三十五号十五年六月二日載。

森田九右衛門

山城國久世郡東富野村字西垣内森田九右衛門。性質
温厚し。深く因果乃道理を信し。専ら稱名相續し行

人カ也。○明治十五年四月下旬病ヲ罹リて逝ク事ヲ四
 く容積あるよりぞ早く往生ノ近き小ありと覺悟シて。死
 後乃葬事トシテ殊ク長く長男久三所ニ委託シ。五月廿
 四日菩提所正行寺に任職某を招請シて更ニ安心起行
 乃告ニ聽聞シ翌廿五日午前六時頭北面西ニ臥シ
 明善正教ハハ法華年日西ニ仰クこと嬉シクありしを
 といひて稱名もろとも目出玄往生を遂めり。壽七
 十五歳明治十五年五月廿五日ありと。法名ニ春登西入
 淨慶禪室門ノ号ニ
 今日記主禪師曰抑見世人各墮偏見難悟佛意悲哉信

因果者他力信弱信本願者因果理信幾專信本願兼
 信因果即悟佛意可逆往生者也已上 交乘抄 修回因果乃必然
 ある道理を知り乃紫の動もそれをもまが機切と慕
 て念佛それぞら小往生それと。垢凡の報土と得生
 るハ他力あると思ふべ又專ら本願と信むる乃族
 か他力の大意は誇りて造罪と厭むねをらそ。殊陸
 悔それと悪无過乃邪見ニ墮是乃ま偏見あり故
 本願の大意ハ垢凡悪悪を捨りせと信づく因果自
 業自得乃必然あると忘れず。少罪とも犯さずと思ふ
 是ぞ佛祖乃正意ニかあへる安心あれを。善信

念佛をよと宣のくるなり。今は九十九歳に及ぶ。其の
詳ありき。深く因果を信し。善悪を相續せしむ。何
れ。其の善より佛意にかあひて。往生する人となりし。其
難く是と名するもや。

貞道禪定門

儀譽貞道禪定門。泉州舟南郡岸和田筋邊町百五十番
地和田儀三所とりくものあり。幼年に頃より相撲を
好む。自ら乃強力を爲す。不良乃暴行乃をせり。其れを
人々忌避し。嫌ひ憎むる者あり。然るに宿昔家後

乃時や到りん。明治十四年三月十五日。泥村浄土宗浄光
寺あり。又重お傳あり。法會に詣り。松葉屋譽乃祝言を
聞し。より。盲者乃眼を冥するぬ。從來乃暴行慚愧乃を
頻り不起りて。始々苦行の道に入り。又重相傳と慕ふ。一
日。日課千遍を誓ふ。其の日々。其の如くお説く。其れ
ひまはしりれ。近邊乃人々も皆お愛し。勸誘かあど。
感歎きざる。あうりり。○同年十一月十五日。り。い。い。
夜も明や。ぬ。頃ある。浄光寺に詣り。任職西田操譽り
面謁を乞ひて。諸系身も報命限る。來春を蓮臺より往生
せ。り。れ。を。更。日。課。を。授。け。り。と。り。し。其。れ。も。あ

佛前あそ日課を誓ひ。夢み録名あ録きり。○十五年一月
小至り聊凌りあれた。三月小往生すべしや。於日課三
善通ふ増加しあり。三月廿五日小至りて彌明後廿七日
子ハ目出度素懐を遂るなりや。うづう佛壇を洒掃
し。清らう小莊嚴し。糞事など殊る限あく調へけり。廿七
日子相より木魚をうちく。うづう念佛し。午後四時
に至りて。木魚を收免奄然とて。往生と遂まりは。実
小明治十五年二月廿七日午后四時なり。時り齡之十二
歳なり。明教新誌千三百八十一号明治十五年九月四日 雜報中にも
載あり。今ハ其妻女乃報知を得て記しぬ。

禪曰此人死乃乃近きを知らし。不引んよひ出
く。又佛告を侍し。其免れ角し。幸ひと捨
悪進善して。出離乃大道に歸入し。いりける宿植
善種の因縁を。日やあるむ。吾曹乃如き他り嫌存
き。程の暴りあをぬも。非を知り改むを得ぬ。
罪を省し。あつて。程造りて。死乃頂上。條むを思ふ
に。世繩に傳繋せしき。去り勇進乃心を生ぜざるハい
う。小ぞや。宿世乃福因ふた。日や。抑亦未了懈怠心より
發死し。死。實に慍愧せ。省思せ。嗟南無阿彌
陀佛

即一信士

即一信士也。磐城國磐城郡中塩部大山崎助とりくも者なり。耳順乃上を五ツ六ツも超へ多言断ありあし。仕若の老も劣らぬ好色人。うく窈窕たる妾を専しく最上乃樂とさり。趣く此邊を不信頑魯乃地。うく。每佛法とりふ厚き程乃境ありりれど。従前説教佛理など。少しそとなく。後世乃及などハ授受付とせりりり。然るり明治十又年六月下旬同郡下平窪村安親寺にて。鎌倉光明寺本山専修寺乃勲乃勲吉水教正を請く。五重相傳ありし。此助毎心あつ。此法會り連り。く。善正乃説教を聽き

一ハ。頓小歸佛菩提乃心を發し。連日此祝敷り。嘗て欠席せり。あく。日課念佛貳百遍を誓ひり。法會結願乃後ハ。いやく信心を增長し。朝夕稱念怠らば最愛乃妾も事に託し。暇を専し。物あど多く取らせり。れを喜び。く出く行きぬ。まら。一家一族を棄て。死後の事など遺託し。形見乃品具などを配分し。早に。佛是みく。系生と足まり。や。大。喜ひ。稱名乃。あ。り。が。七月始乃頃。り。氣分悪し。とて。蓐床り。お。ひ。ぬ。ま。づ。く。往生近し。や。先菩提寺乃任職を請く。般若理趣分と讀誦を。先。本宗本宗と。そ。く。宗。法名を乞ふ。ま。ま。法心即一善清

信士と稱りぬ。同月十八日端坐念佛一多し往生

明教新誌千三百八十三号
十五年九月八日 雜報二載

評曰即一信士出離乃時至りしや。うきく浄土乃一
度小留入し。寂期回心念佛也。日課少く亦或百遍と
いへば必死覚悟乃前之。於夕称名する。宣ふ願教を限
りむや。是尚畢命為期乃称名とせば。導師云若深信
浄土無為樂者善心一發永不退失也。平常課称を早
く。余暇怠慢し趨き思量をもて。課教の修少と見る可
なりん。

緒方屋女同母

豊前國企救郡小倉田町二丁目平民緒方屋女。浄土
宗長圓寺乃檀徒。常々他方易行の法義を聴聞し。日
課称名怠り相續せし。其夫某々六年以前他國あり。命
終せし。頼之少き憂世乃有様を感ひ。偏り西
方往生を願ひ。親者古任職西田謙義より。五重お傳を稟
せり。稱名とす。○明治十四年十月乃頃より病に似し。
臨末玉至り。曼之自身に左服より釋迦如来出現す。
空中に引接志願ふと名る。終之十一月六日正念
り往生を遂り。時年四十六歳なり。○同人母法子女是

も若死時より又重相傳しく一向専念乃行者ありり
が。明治十五年二月十日より病床より臥し。同廿九日
看護の人と懇々。床乃留み来迎乃佛像を掛け香燭を
奉りを令往生乃近づくを待く。佛名を唱つ。三月六日
午前五時不浄乃尿を洗濯しく西田講義を請しく。善知
識とあり。同日七時眠る。如く正念往生しありり。斯
く教子ありとも小大往生と遂より。一。奇ふ。男難き仕
合をかりと。明教新法千三百九十三号。記載あり。年七十
二歳なり。

浅田ぬき女

東海道島田驛四丁目浅田賢治郎母ぬき。常に佛教を信
ト行業正しき老嫗ありり。風と病ふ臥し。悴賢
治の孝養乃志深く種々医療を盡しりれど。老病乃病
病更に効驗もあらず。明治十五年八月中旬より。病人
ハ来ル廿八日より往生すべしと云。居りりれど。左程
危篤乃容赫くも見く。廿七日乃夜賢治郎を枕をり。召
びく。さく。曰。兼云。ぬき。明日ハ往生すべし。就くハ佛
檀の下小仕也。ある。文庫を取来よと。そいふ。ゆき。小
持出。す。そ中より。葬儀ニ着用す。べき。牌が。無紋乃上下

娘三人が用ゆる白布垢外之金百五十圓を取申し是に
 く葬儀乃弟事と整よと。賢治良の翁了岩出せ將を始免
 見る者母乃用意乃整ひたるふお驚き居るふ翌日八
 日陰曆七月十五日當端坐合掌一。

けそめれを問もなくおハ西へゆく強尼乃浄土を住む
 一きと一首乃辞世して目出な往生を遂ぐる時七十
 六歳ありと。明教新誌千四百号十五年十月十二日に載あり

評曰此ふき女行業正したとのをみて專修の行志あ
 りや。將洒落乃運公年久しく。禅味を分得あたる。辞
 世の身は煮り。專修欣淨乃人と見ゆれども平常に

能行状りしむと知れぬ。さもあつたをけき死期乃日を
 き。益々藝儀乃用意あるころうげともて見れ
 む。待死念佛を一人あるを知るべし。能るを公得遠く
 とかく事状を志慕し知死期乃一度ふむとけ
 死後の名ゆり思ひをまことびて念佛するもの有り。死
 弱上人乃舍利ふ成終るといひく念佛を一人の如く
 近世往生傳端言ニアリ奇特乃事業のそみて。往生を得るは。後。往生
 と志し念佛がふやを。形も奇特ハおのづから
 かり。されど奇特の有りて。後。期日能知ふを思ふ
 べ。唯一向に往生と信じて念佛を。專修功積る

成獲をとりあしむや。

信勤

經曰。具三心者。必生彼國。其往生一大要。乃成不の三心
 乃具不具。不あり。其三心を具するに。助縁く南無阿彌陀
 佛。乃至誠ある不あり。其安心起行。乃誠實あるに。念佛中
 留るま。其後世者の心とあり。其後世者乃心とあり
 ん。不勤。又死を念ぐる。如う。彼教佛上人云。世智出
 世。乃至極。その死乃一字なり。死を死とあふ存ぞ。此
 ぞ。一切。又大事のなり。此身と覺し。死を怖る。より
 一切。乃際りの發る事なり。後世を思はん。人々。生死界此
 事とあかり。くおもふ。極る。次一言と。是。我。誓。古。より。あ

あり凡そ生るる者必死ぬるといふを警警乃推量も能
く之を知る。而して八十北老翁も之を決思ひする事能と
ば故に無常の脚跟下を逼るを思ふ。世間目前乃幻変
り心勞して後世永劫乃苦果を憂思せぬより念佛を相
續するも唯世間形容乃虚假不実乃行となるあり。邪言
浮薄虚假乃去行豈又往生乃正固となすむや。されど称
する念佛の同一りれども。其心向乃実と不実と。生
を得ると得ぬと差別ある故に。平常能くお續し念佛
を一人乃修證乃ありき。皆此心向乃不実なるより教
を修り能く用ひるべし。法華經西上人云往生の三心

是乃念佛の行ありはなり。其のほは三心の人乃内
なり。可なり。他人より具不具の知がたあり。此故に念
佛の教通を勧むなり。已上大う念佛の教通不勇にあり
程の人。三心を具せぬ者あるを慮り。次第もすれど日
課称名のありけり。少くともと始より懈怠乃用意を
する程乃志い。其心向もおのづから不実とあるべし。然
るに如く次第多念救通ありていといふ。又あり。次お乃
家業と學と此志深あり。根茎は揺る不乃強弱あり。一列
るべし。次第といふも。早覺志意飲慕乃心して。往生と
向けし中念佛とぞ。三心具足といひ。されど其実飲慕

三ふはつゝりあるなり。かやるる死を忘れぬ。三の具足
乃念佛一終へり。

明治往生傳三篇助梓名署

金拾圓某教正爲日課同行心

行警策金壹圓相州足柄下郡真鶴西念寺垂水良運講義金
五拾錢同小田原安樂寺近藤祐運氏金五拾錢同所新光明
寺別所亮信氏金壹圓同塔之澤中田暢平金壹圓同大住郡
平塚鈴木清德金壹圓同所杉田屋貞順金五拾錢陶綾郡大
磯笹尾伊知女金壹圓岩代伊達郡方正寺村觀音寺佐泊祐辨氏
金壹圓羽後南秋田郡廣面本念寺工藤廓導金壹圓同久保田
川連新太郎金壹圓同所針生源太郎金壹圓同所岸政吉金壹
圓同所鎌倉志毛金五拾錢同所木村喜助金五拾錢同所專
信講中金五拾錢同深信講中金五拾錢同芳信講中金壹圓
羽後由利郡本庄工藤長吉金五拾錢同山本郡淺内畠吉良治
仰望喜捨道俗現當所願皆令滿足俱登寶蓮
俯願見聞緇白信謗結緣共發道心齊泳願海

明治十六年十二月

吉水大智謹誌

明治十六年十二月十二日出版御届
同 年十二月 刻成

著述人

神奈川縣平民

垂水良運

相摸國足柄下郡真鶴村六百四十五番地

同

縣平民

吉水大智

同國鎌倉郡乱橋材木座村百四十三番地

出版人

東京南傳馬町一丁目

大村屋總兵衛

同 下谷南稻荷町

和泉屋庄次郎

同 芝飯倉五丁目

山口屋佐七

發兌

定價金廿錢

